

「旧約の信仰者たちの手本」士師たち ③ (11:32~34)

これ以上、何を言いたいでしょうか。もし、ギデオン、バラク、サムソン、エフタ、
またダビデ、サムエル、預言者たちについても話すならば、時間が足りないでしょう。
(ヘブル 11:32)

■士師記の時代 (Ariel's Bible Commentary "Judges & Ruth"と聖書辞典による、作成責任は清水)

*1	士師/リーダー	時期(紀元前)*4	年数	備考	救助者?
		(1447-1407)	40	出エジプトから荒野の旅	
		(1407-1400)	7	約束の地の征服 (ヨシュ 14:7~10)	
		(1400-1390) (1390)	10	分割からクシャン侵攻迄 ヨシュアの死 110歳	
		(1390-1382)	8	アラム・ナハラーム (メソポタミア) の王クシャンによる支配	
1	オテニエル	(1382-1342)	40		○1
		(1342-1324)	18	モアブ人による支配	
2	エフデ	(1324-1244)	80		○2
3	シャムガル	エフデと同時期	*	ペリシテ人からの圧迫	○3
4	女預言者デボラ	(1244-1224)	20	カナン人の王ヤビンによる圧迫	
5	バラク	(1224-1184)	40		○4
		(1184-1177)	7	ミデヤン人による圧迫	
6	ギデオン	(1177-1137)	40		○5
	【アビメレク】	(1137-1134)	3	兄弟を殺し、私的支配	
7	トラ	(1134-1111)	23		×
8	ヤイル	(1111-1089)	22		×
		(1089-1071)	18	東側アモン人*2	
9	エフタ	(1071-1065)	6	アモン人が宣戦	○6
10	イブツァン	(1065-1058)	7		×
11	エロン	(1058-1048)	10		×
13	アブドン	(1048-1040)	8		
12	サムソン	(1069-1049)		誕生は (1087) 頃*3	○7
	エリ	(1107-1067)		ペリシテ人に契約の箱を奪われて死す	
	サムエル (預言者としての活動は、1067以前から Iサム 3:20)	(1067-1020)	20	【年数 20 は、アブドン終了 1040 年から】	
		(1047) Iサム 7		エベン・エゼルの戦い	○
		(?)		サウルを王とする *5	
		(-1020)		ダビデに油注ぎ、死す・ダビデ 20歳逃亡中	
		(1020-1010)	10	サウル王の統治後期	
		(1010-1003)	7	ダビデ王 30歳へブロン	
		(1003-970)	33	ダビデ王エルサレム	○
		(970-967)	3	ソロモン王神殿着工まで	
	合計		480	I列 6:1	

前期

後期

- *1 士師記には、13人の士師が記録されている。祭司エリ（Iサム1:3、4:18）と預言者サムエル（Iサム3:20、7:15）は、士師記に記録ないが、士師である。
 - *2 9番以降の士師は、活動の領域が、ヨルダン川の東と西に分かれる。東はアモン人、西はペリシテ人の攻撃を受けたため（士10:7~8）。東ではエフタ以下4名。西では、エリ、サムソン、サムエル。
 - *3 士13:1のペリシテ人の支配40年間は、サムソンが誕生する頃からエベン・エゼルの戦い迄
 - *4 時期は、出エジプトを（1447）と仮定し、「年数」を当てはめたもの。おおよその推定年である。
 - *5 サウルが王となった時期については、不明。
- Iサム13:1「サウルは30歳で王となり、12年間イスラエルの王であった」。原文では「サウルは〇歳で王となり、2年間イスラエル王であった」。欠けている年齢を「30」と推定し、2年間の十の位の単語が欠けていると推定して「12」年間と訳したものである。この訳では、サウルの死亡時の年齢が42歳となる。サウルが死んだときに息子のイシュ・ボシェテは40歳である（IIサム2:10）ことを見ると、この訳は誤りである。
 - Iサム13:1の「2」年間の、「20」年間と推定する説や、サウルの王となった時期を、紀元前1043年頃と推定する説などがある。
 - 使徒13:21では、サウロの在位期間を「40年間」としている。サウロ王が戦死した紀元前1010年から40年さかのぼると、紀元前1050年頃となる。この時期は、サムエルが士師として指導的立場にあったころである。サウルの登場は、エベン・エゼルの戦い（紀元前1047年頃）よりも後なので、サウルが王となった時期を紀元前1050年頃とするのは無理がある。「40年間」というのは、サムエルとサウルによる統治期間を通算して指していると考えられる。

■ 前回までの内容 士師たち ① ギデオン、 ② バラク から

1. ギデオンは、臆病で内心は恐れを感じていた弱い人であった。
 - (1) 軍団を召集したあと、主にしるしを2回も求めた。
 - (2) 戦いの直前にミデヤン連合軍の陣営内を偵察（7:9~14）したのは、「もし・・・恐れるなら」（10節）とあるように、この時点でも、まだギデオンは恐れをもっていただけであった。主は、ギデオンに、敵兵の「夢」と「その解釈」を聞かせ、決心に導いた。
 - (3) ギデオンは、まさにヘブル11:34にあるように、「弱い者なのに強くされ、戦いの勇士となり」の人であった。
2. バラクは、女預言者デボラの陰にあつて目立たない存在であるが、信仰の勇者である。
 - (1) 自分で画策せず、神の召命を待った。
 - (2) 戦いに勝利する条件は、神がともにおられることであると心得ていた。
 - (3) ひとたび神の召命を受けると、躊躇なく勇敢に戦った。
 - (4) 自分の手柄にはならないと言われても構わず、自分の使命を果たした。

■ 本日の内容 士師たち ③ サムソン

1. サムソンについて総括してみると・・・
 - (1) 士師記には女預言者デボラも加えると13人の士師たちが登場する。
 - ① 士師の役割は、ひとつには内政の指導者、ふたつには外敵からの救助である。
 - ② 13人の士師のうち、二つを兼ね備えた士師は、7人。
 - ③ サムソンは、その7番目である。

- (2) サムソンは救助者になったとはいえ、他の 6 人のようにイスラエルの軍団を召集しての戦いを指揮したわけではない。
- ① 彼の戦いは、単独での戦闘であった。
 - ② 彼の士師としての活動は 20 年間 (15:20) であったが、その期間はペリシテ人による支配下であった。
 - ③ 士 13:1 には、ペリシテ人の支配下にイスラエルがあったのは「40 年間」とある。
 - 40 年間のスタートは、サムソンが生まれた頃。
 - ペリシテ人の支配に終止符を打ったのは、サムソンではなく、預言者サムエル (I サム 7:10~13 エベン・エゼルの戦い)。この戦いは、サムソンの死後、2 年程度。
- (3) 他の士師たちがイスラエルの危機の中で士師としての召命を受けたのは、彼ら自身がある程度の年齢に達していたときである。これに対して、サムソンは生まれる前から召命を受けた。
- (4) 士師記では聖霊について 7 回言及される。このうち、4 回はサムソンに関係する。
- (5) 士師記では主の使いについて 23 回言及される。このうち、13 回はサムソンに関係する。
- (6) 士師のうち、ナジル人はサムソンだけである。
- ① ナーギール・・・「聖別する、分離する」を意味するナーザルに由来し、「聖別された者」「ささげられた者」を指す。
 - ② 民数記 6 章にその規定がある。「主のものとして身を聖別するため、特別な誓いをして、ナジル人の請願を立てる場合」(6:2)
 - ぶどう酒や強い酒を断つ。
 - ぶどう酒の酢や強い酒の酢を飲んではならない。
 - ぶどう汁をいっさい飲んではならない。
 - ぶどうの実の生のものも干したものも食べてはならない。
 - ぶどうの木から生じるものはすべて、種も皮も食べてはならない。
 - 頭にかみそりを当ててはならない。頭の髪の毛をのぼしておかねばならない。
 - 死体に近づいてはならない。
 - 父、母、兄弟、姉妹が死んだ場合でも、彼らのため身を汚してはならない。その頭には神の聖別があるからである。
 - もしだれかが突然、彼のそばで死んで、その聖別された頭を汚した場合、彼は、その身をきよめる日に頭をそる。すなわち 7 日目にそらなければならない。そして八日目に山鳩二羽か家鳩のひな二羽を会見の天幕の入り口のところに持ってこなければならない。祭司はその一羽を罪のためのいけにえとし、他の一羽を全焼のいけにえとしてささげ、死体によって招いた罪について彼のために贖いをし、彼はその日にその頭を聖なるものとし、ナジル人としての聖別の期間をあらためて主のものとして聖別する。
- (7) 「主が彼から去られた」と記された士師は、サムソンだけである。
- (8) 敵と破滅的な関係を持つにいたる士師は、サムソンだけである。
- (9) 捕虜となり、そのまま敵地の中で死ぬ士師は、サムソンだけである。

- (10) I サムのエリがシロで祭司として活動している時期にサムソンは成長し、預言者サムエルがイスラエルの民を信仰に導いていたと同じ時期にサムソンは士師として活動した。
- (11) 士師 13:1 には、イスラエルがペリシテ人の圧迫を受けながら、神に叫んだという記事はない。また、サムソンがイスラエルに挙兵を呼び掛けたということは一度もない。ここでの焦点は、民族的救出ではなく、実はサムソン本人を救うことである。サムソン自身がナジル人としての誓約に背いていくうちに自分自身を窮地に追い込んでいった。
- (12) イスラエルの時代的雰囲気が変化している。ペリシテ人の支配を受けながら、その圧迫に苦しむというより、ペリシテ人との共存を受け入れている。
- ① サムソンは、自由にペリシテ人の町に出入りした。
 - ② ユダ族は、ペリシテ人の攻撃を受けたときに、サムソンを引き渡した (15:9~13)
- (13) 士師の役割が変化している。サムソンの士師としての活動は、問題を解決するよりむしろ、問題そのものとなっていく。
- (14) 他の士師に比較して、サムソンの場合、彼自身の倫理的・霊的な弱さが特に記録されている。
- (15) サムソンの人生では、女性が大きな役割を果たしている。サムソンの母、最初の妻、ガザの遊女、ペリシテ人の女性デリラ。
2. サムソンはイスラエルの型であると見られる、その9つの似た点は・・・
- (1) イスラエル民族の誕生も、不妊の女たちから (サラ、リベカ、ラケル)。神の約束によって生まれてきた。
 - (2) イスラエル民族もサムソンも、神のために聖別され、分離された存在である。
 - (3) サムソンは未熟な人格であった、イスラエル民族の信仰も未熟であった。
 - (4) サムソンは外国人の女にひかれた。イスラエル民族も偶像の神々にひかれ、主の妻であったのに「遊女」と呼ばれるようになった。
 - (5) サムソンもイスラエル民族も、敵の圧迫と束縛を経験した。
 - (6) サムソンは獄中から神に助けを呼び求めた。イスラエル民族もしばしば圧迫を受ける中で神に叫んだ。
 - (7) サムソンは肉体的に盲目となる。イスラエル民族は霊的に盲目となった。
 - (8) サムソンは主が自分から去られたのに、それを知らなかった (16:20)。イスラエルも同じ、神がその御顔をイスラエルからそむけておられるのに、イスラエルはそれを知らなかった。
 - (9) サムソンと神の関係は回復された。そしてサムソンの強さは、新しくされた。同じように、イスラエル民族も、新しい士師の登場で強くされた。サムエルである。
3. 記事を見ていきましょう・・・
- (1) イスラエルの罪とペリシテ人の圧迫 (13:1)
 - (2) サムソンの誕生 (13:2~25)
 - ① 主の使いがダン族のマノアという人の妻に現れる (13:2~7)
 - ② 主の使いが再び妻に現れ、妻はすぐに夫マノアに知らせる (13:8~14)
 - ③ マノアと話したのち、主の使いが祭壇の炎の中を上っていった (13:15~20)
 - ④ マノアの恐れと妻の反応 (13:21~23)
 - ⑤ 約束のとおり子が生まれる。そして主の霊が成長したその子サムソンに臨む

(13:24~25)

(3) サムソンの結婚 (14:1~20)

① サムソンの一目ぼれ (14:1~4)

- それは、主によることであった。主はペリシテ人と事を起こす機会を求めておられたからである (4節)

② ライオンと蜂蜜 (14:5~9)

- 両親とサムソンの一行、ティムナのぶどう畑に来ると、サムソンはナジル人なのでぶどう畑の中を通らずに迂回する。迂回路をひとりで歩いてライオンに遭遇する。だから、両親はこの出来事を見ていない。
- しばらくたってから、サムソンは、彼女をめぐろうと引き返してきた。→ 婚約は父親が決める。期間において (1年程度)、その間に新居を準備してから花婿は花嫁を迎えに行く。→ ライオンの死体は白骨化して乾いていた。その中に蜂が巣を作り、蜜を貯めていた。
- サムソンは、その蜜をかき集めて、歩きながら食べた。

③ 結婚式となぞなぞ (14:10~20)

- サムソンは祝宴を催した。祝宴は7日間続いた。「若い男たちはそのようにするのが常だった」というのは、ペリシテ人の中での習慣。サムソンはナジル人であるから、ユダヤ人であれば、酒を伴う宴会はしない。
- ペリシテ人たちは、サムソンを見て、ユダヤ人なので、争いごとになったときの対応のため、警備役の30人の男 (ペリシテ人) をサムソンに付けた。
- サムソンの新妻は、サムソンを裏切ってなぞなぞの解答を漏らす。サムソンはアシュケロン (ペリシテ人の町) に行つて30人を殺し、彼らから略奪した晴れ着を警備役の30人に与えた。サムソンは怒つて、新妻を置いて、父の家に帰った。
- 新妻は、警護役だったひとりのペリシテ人と再婚した。

(4) ペリシテ人の麦畑の焼き討ち (15:1~8)

- ① サムソンが妻のもとに戻ってくると、すでに他人に嫁いでしまっていた。彼女の父はサムソンを拒絶。
- ② 「私がペリシテ人に害を加えても」→直訳すると「彼らの上に、災害が降りかかっても」→ジャッカル、訳によってはキツネ。ジャッカルは群れで動くので300匹捕えたということから、ここはジャッカルと推定される。
- ③ 甚大な経済的被害を受けたペリシテ人は、元妻とその父親を焼き殺した。皮肉にも15節で脅されたとおりになってしまった。これにより、サムソンには妻と義理の父を殺されたという新たな報復理由が生じた。
- ④ サムソンは彼らを取りひしいで、激しく打った。→直訳すると「サムソンは、彼らを、尻からももまで打って、殺した」下線部はヘブル語の慣用句で、完膚ないほどに打ちのめすこと。「彼ら」とは、元妻とその父親を殺した犯人たち。
- ⑤ サムソンは、7節で予告していたように、報復を終えると、手を引いて、エタムの岩の裂け目に入って、隠遁生活を始めた。

(5) レヒの戦い (15:9~19)

- ① ペリシテ人はユダ族の領域に軍を進めて、レヒの町を包囲。サムソンの引き渡しを要求した。

- ② ユダ族の人々は、3千人を出してサムソンを捜索、エタムの岩の裂け目にいたサムソンを見つけた。サムソンは、ユダ族の人々が自分に手荒なことはしないなら、おとなしく捕まってやることを約束する。さもないと同胞を殺すことになる。→ 彼らが新しい縄でサムソンを縛ったのは、古い縄だと弱くなっていて切れる恐れがあったから。新しく強い縄でサムソンを縛り、その岩から引き上げた。
- ③ 14節から17節までは、ペリシテ人との戦い。サムソンは、「生新しいろばのあご骨」を武器にして戦う。これは、「死体にふれてはならない」というナジル人の誓いに対する違反である。
- ④ 18節から19節までは、サムソンの死ぬほどの渴き。サムソンは激しい渴きを覚え、主に呼び求めた。主はそれに応じて岩を裂き、水を与えた。これを記念して、そこの地名は、エン・ハコレ「呼ばれる者の泉」となった。
- (6) サムソンの士師職 (15:20)
- (7) サムソンとガザの門 (16:1~3)
- (8) サムソンとデリラ (16:4~22)
- ① サムソンは、ペリシテ人の女デリラを愛した。ペリシテ人の領主たちは彼女を銀1100枚で買収し、サムソンの強さの秘密をさぐらせる (16:4~5)
- ② デリラの企て1回目 (16:6~9)
- 弓の弦は、動物の腱で作る。まだ干されていない新しい弦は、「死体」にあたる。これを身に近づけることも、ナジル人の誓いに対する違反。
 - 「七本」は、サムソンの髪の毛の七ふさに近づいている。
- ③ デリラの企て2回目 (16:10~12)
- 「仕事に使ったことのない新しい綱」とは、汚れたものに触れたことのない綱、聖さを暗示している。ナジル人として聖別されていることが強さの秘密であることに近づいている。
- ④ デリラの企て3回目 (16:13~14)
- 織っている途中の布の経糸(たていと)に私の髪の毛の七ふさを織り込む
→七ふさの髪の毛に直接言及している
- ⑤ デリラの企て4回目 (16:15~20)
- 19節「ひとりの人」直訳すると「その人」、かみそりで剃る達人であろう。眠っているサムソンが気づかないように髪の毛を剃り落した。
 - 彼を苦しめ始めた=デリラによるテスト
 - 彼の力は彼を去っていた(19節)=主は彼から去られた(20節)
- ⑥ サムソンの逮捕 (16:21~22)
- 21節 臼をひく=力仕事ではない、通常は女性の仕事。
- (9) サムソンの死 (16:23~31)
- ① ペリシテ人の祭り (16:23~25a)
- ② サムソンの復讐 (16:25b~30)
- 一日にして、ペリシテ人の領主たち全員(5人)が死んだ。
- ③ サムソンの葬り (16:31a)
- 明らかに、ペリシテ人たちは、サムソンの最後について敬意を払い、厳粛な思いで遺体を引き渡した。
- ④ サムソンの士師職 (16:32b)

サムソンには、どのような信仰の手本が見られるのでしょうか

4. サムソンは、倫理的にも霊的にも弱い人で、デリラの執拗な求めに負けてしまった。
- (1) 体力的にも本来の自力は弱い（懲役では臼を引いた＝女性の仕事）。筋骨隆々の大男ではなく、その力がどこから来るのか不思議に思われたほど、見かけは普通の体格の男であったと推測される。
 - (2) 積極的に殺戮を好んだわけではない。襲われたり、裏切られたりして、その報復で戦う。その力の源は、主の霊にあった。
 - (3) この時期、イスラエル民族はペリシテ人の支配下で、それに抵抗するより、むしろ受容・同化していた。サムソンの戦いは、単独でのものであった。しかし、神はサムソンひとりに孤独な闘いをさせていたのではない。この同じ時期に、預言者サムエルを立て、イスラエル民族に語りかけておられた。
 - (4) サムソンは、倫理的に弱い。異民族の美しい女性に惹かれる傾向があった。その弱さを、神はサムソンが単独で戦うことになるように用いた。神は、人が弱く、欠点だらけであることを知っておられる。それでも用いてくださる。
 - (5) サムソンは、霊的に弱い。ぶどう畑を迂回した、これは注意深くナジル人の誓いを守ろうとしている。その他方で、汚れたもの、死体に触れてはならないという誓いの面では違反を重ねた。
 - ① ライオンの白骨の中に蜂が巣を作った。その蜂蜜を手にとってなめた。
 - ② ろばの生新しいあご骨を手にして、武器とした。
 - ③ まだ干されていない新しい腱（弓の弦にするための動物の腱）で自分の体を縛るようにさせた。
 サムソンはこのようにナジル人の誓いに何度も違反したが、神は忍耐してくださった。
 - (6) サムソンの弱さは、ついにデリラの執拗な求めに屈して、力の源を明かすに至った。越えてはならない一線をサムソンは越えた。そしてナジル人のしるしである彼の髪の毛は、デリラの膝まくらの上で敵の手によって気づかないうちに剃られた。このとき、主の霊は彼から去った。
 - (7) サムソンは、肉体的な裁き（両眼を失う）を受け、獄中につながれ、臼を引かされる。しかし、敵の手により剃られたとはいえ、「髪の毛を剃る」とは、それまでに受けた汚れから清められたことのしるしとなる。ナジル人として再出発できたサムソンは、獄中で主を呼び求めた。
 - (8) サムソンは、ペリシテ人の領主たち 5 人全員が揃う祭りで見世物とされたが、ここで最後の、そして最大の働きをした。サムソンによって巨大な石造の神殿、偶像ダゴンの宮が崩壊した。ペリシテ人は、一日にして 5 人の領主たち全員を含む数千人（屋上にいた者だけでも 3 千人）を失ったが、この出来事はサムソンに対する敬意を覚えさせるものであり、穏やかにサムソンの遺体をイスラエル側に引き渡した。
 - (9) サムソンもまた、ヘブル 11:34 にあるように、「弱い者なのに強くされ、戦いの勇士となり」の人であった。